連載　河北潟の仲間たち

第14回　モクズガニ

上流から河口まで何処にでもいるのに、あまり知られていない地味なカニ、でも実は親戚は超有名で本当はとてもおいしいカニ、モクズガニはそんなカニです。

同じ川にすむカニであるサワガニと比べるとはるかに大型で、甲羅の幅は6～7cmになります。成体は基本的に河川にすんでいますが、純粋な淡水ガニではなく、繁殖の際には海へと下ります。海で産卵した親はそのまま死んでしまいます。孵化した幼生は海で成長しますが、このときは水の中を漂って生活します。その後、変態して稚ガニとなり、成長するにつれ川を遡上していきます。

通常は、水中で生活していますが、陸上の移動能力も高く、切り立った砂防ダムの上流側でも時折見かけます。筆者は、河川敷のヨシ原の中で歩いている姿をみつけたことがあります。かなりの長距離を遡上するようで、たとえば浅野川の上流、湯涌の辺りの小河川にも生息しています。

もちろん河北潟にはたくさんのモクズガニが生息しています。あらゆる水路にみられ、河北潟の水系をいちばん行き来している生物かも知れません。かつては「カワガニ」と呼ばれ、食用にもされていたようです。以前、あるイベントで津幡町の年配の方から振る舞われたことがあります。おもに中腸腺という、いわゆるカニ味噌をいただくのですが、味の濃いカニで大変おいしくいただきました。

大きなはさみの割には、餌は主に水草などの植物質のようですが、ときに小さな動物を捕らえて食べることもあるようです。このはさみの甲の部分に柔らかな毛が密生しており、これが藻屑蟹の名前の由来となっています。

実は、このモクズガニの親戚は上海ガニです。図鑑に出ている和名ではチュウゴクモクズガニといい、日本のモクズガニとは同属異種の関係にあります。モクズガニと同じくらいの大きさですが、甲羅の前側部についているトゲの数はひとつ多く4つあります。本場中国では養殖が盛んで、筆者も蘇州近郊の養殖場の横を通ったことがありますが、それなりの規模のものでした。

10年ほど前から、日本国内でも養殖をおこなっているとの新聞記事がみられるようになりました。ため池などでの養殖がおこなわれたようです。現在では、外来生物法に基づく特定外来種に指定されており、生きたカニの輸入や運搬、飼育が厳しく規制されています。環境省のWebによると、近年、世界各地に移入して生態系に悪影響を与えたり、土手に巣穴を開けて問題となった事例があるようです(http://www.env.go.jp/nature/intro/1outline/list/L-kou-05.html)。一方で、「外来生物法」にもめげず、上海ガニ養殖事業が復活などと題するWebページもあり(http://blog.livedoor.jp/tknmst/archives/52094688.html)、いろいろ考えさせられます。身近なカニ、在来のモクズガニは、どうも影が薄いようです。(文　高橋　久)